

中島川水辺の表情 (一)

古屋 陸夫

眼鏡橋の一つ下流は袋橋。この袋橋は、旅行者が長崎の石橋群の記念写真をとるとき、足場として一つ上流の眼鏡橋を撮影している姿をよく見掛ける。ある日、この袋橋を渡っていると、川の真ん中に一羽のカラスが居た。浅瀬になった小岩にカラスは足を掛け、しきりに何物かをつついている。

私は橋の欄干に手を置き、何かと覗き込んで見ると、つついている物が分かった。それは一匹のカニであった。手のひら大、直径一〇センチ位の大きさである。カニの大きさにも驚いたが、更にその甲羅をカラスがついついでいる珍しい光景に出会った。

「カニは、おのれの甲羅に似せてあなを掘る」と言うが、この場合、カニは小岩と小岩の間にびったりとおさまっていた。従って側面からのカラスの攻撃は免れ、口ばしの威力と甲羅との対峙という様相であった。カラスは甲羅目掛けて、集中的につつく、其の目的は、「甲羅の中の肉を食べたい」というのが本音であろう。



袋橋 (北川るみ子提供)

カニは、のそのそと下手に動けば、得たりとばかり、カラスの好餌になるであろう。今は、堅い甲羅で耐えに耐えて、じつと寸分も動かないで居る。片やカラスは、私の気配を感じると攻撃の口ばしを中断して、私を見詰めるのである。互いにしばらく見詰め合いが続く、先に目をそらしたのは、カラス。危害を加えられる距離ではない、と見てとつたのか、私を無視して、またつつきをやりはじめた。

甲羅の上にはうつつすらと、川水がおおつていた。カラスは口ばしを少々ぬらしながらの攻撃であった。カニの甲羅は平面ではおおつていた川水が少し増えてきているようだ。いままでの一センチが、三センチという具合に。気のせいか、辺りを見、水面を見る。あちこちの小岩と小岩のくぼみにある水溜りの面積が、広がってきているようだ。

見ると、カラスのつつき方も、なんだか弱々しい、ためらいながらの動作。更に見回すと、なんと遠く長崎港からの潮流が、満ち潮となり、水勢が下流から押し上がってきているのである。

カラスの足下にも水深が増し、二本の足が水没寸前、甲羅をつつくには、顔、目玉まで水中深く差し入れ、ぬらさなければならぬ。水辺のサギたちとは違い、カラスにはそこの芸当はできない。件のカラス、腹まで届きそうな水勢にたまたま、ひよい、と大振りな岩に身を移し、私の方をまじまじと見詰め、ちよと首を傾げ、にやりと笑ったようにも見えた。これこそ気のせいかな。そして悠然と、近くのビルの屋上に飛び立って行ったのである。

結局、一羽と一匹と一人の思わくは、三者三様傷みわけ。カニはカツとつつかれ、ずいぶん痛い思いをしたであろうし。カラスは食事にありつけず、屋上から、まだ私をうらめしそうに見ている。私は歯医者ゆきの予約の時間が切れた。それも自然という潮流の公平な配剤によるもので、これ以上めでたいものはない。

中島川を詳細に見ると、刻々と変化する水辺の表情があり、観光として見る光景とは、またひとあじ違った表情に気付く。

カラスとカニの相克も、ふとしたおそい春の一日、水辺の表情で川は生きていのである。中島川の下流は汽水域で、海水と淡水が混り合う流域。ここに棲む生き物は、多種であるはず。実際はどうなのか？昔はハゼが沢山いたと聞く。先程のカニは、長崎港からやってきたツガニで、正式名はモクズガニともいう大型のカニである。

近年は護岸工事で、中島川筋も観光地としてふさわしい整備がなされている。時代ごとに、水の流れる器は変わっていく。然し、山から下りてくる水流も、海から上がってくる潮流も、昔と変わらない。器は変わっても、中味そのものは変わらない。中味の歴史とは、水辺に棲む生き物たちのなりわいが、種類も豊かに、ずっと続いていく。これが川は生きていて、川の歴史だと考えている。

(九州文学同人、長崎市住)

ない。丸みのある流線型、本来これは流水の抵抗を少なくするためにそうなっている。この場合も幸いなことに、口ばしがついても平面につき当たるのではなく、丸みのある甲羅なので、その分、衝撃をゆるめることになる。

自然の造物主は、甲羅をこのように設計したのである。例えば、動物や昆虫に保護色があるように。しかし絶対に安心安全と、いうことではないのは、眼下のカニも同じである。

私の同情心が湧くのは、一方的にやられているカニにであり、決してカラスの方ではない。同情心は、このカニを助けたいという気持ちに進む。キョロキョロ橋の周辺を見回しても、小石一つ見当たらない。投げ付け

るべきゴミ屑すらもない。ここは観光地なのである。威嚇の手を振り、シッシツと声を出してみる。その瞬間、つつくのをやめ、私の動きを不審そうに見る。私とカラスの距離は一〇メートル位、手振り足踏みしたところで、届く距離ではない。ポケットを探ると、小銭入れがある。硬貨一〇枚一十円。この重みだと小石ほどの効果はあるう。しかし年金も減り、あまつさえ介護差引急増のダブルパンチ。手もと不如意の折柄、お金を投げ捨てるほどの決断もできない。

カニの命と千円と、どちらが大切か？くもの糸カンダタのふるまいよりも劣りはしないか。しきりに煩悶する。そつと千円の硬貨を取り出し、財布だけ投げ付けたらどうか。それは軽い軽い、投げ付けても蝶の舞うが如し、効果はない。

カラスにあざわらわれよう。仕方なく手振り身振りで、中断の時間稼ぎをやる。カラスもちらちらと中断するが、これとて長続きはしない。「あの人間のやること危険なし」とカラスも学習するのである。ついには、カラスから完全に無視をくらう始末。

如何にヒマ人とはいえ、いつまでも一羽と一匹に、お付き合いはできない。などと考えていると、おやつ！と何か異変を感じだした。甲羅を

風信

○中国・ミャンマーに続いて六月は岩手・宮城・秋田方面の大地震、「私達の足もとは大丈夫ですか」と知人が言われる。先輩が私に「昔、長崎・佐賀の地方は肥前、熊本は肥後と言った。肥は火の意味であり、両地方共、火山地方である事を知っておきなさい。」と言われる。そう言えば雲仙に阿蘇、佐賀の天山、五島の鬼嶽、すべて火山でしたね。

○ところで其の災害地秋田の事で、先日、洋学史研究の片桐一男教授より心あたたまるお便りを戴いた。それは、文政十三年(一八三〇)シーボルト事件に連座し永牢となり、秋田佐竹藩に流罪を命ぜられたオランダ通詞馬場八郎が、藩主の思いやりによって「幕府にかくれ手厚く保護されていた」という研究論文である。(洋学史研究二二五号)為八郎は城下では自由行動が許され、藩士にオランダ学を教授していたが、幕府巡見使が来た時は為八郎を室に入れ、巡見使には「日夜嚴重に致しております」と答えさせていたと「覚書」に記してあるそうである。

○六月の本会の史跡探訪は「長崎名勝図絵」記載の史跡を中心に、六月四日、宮田修二氏を中心に茂木地区を歩いた。地もとより高橋貞信・田畑両氏の協力もあり、非常に楽しかった由。そして帰りには茂木一〇香さんよりお土産を戴かれたとの事。

○八月はお盆であり「お盆の事」を書いて下さいと言われる。お盆の語源はサンスクリット(古代インド語)の *avastambana* (又は *Ullambana*) で「さかさに吊さる」の意である。それより「非常に苦しむ人を救う行事」の意とある。我国では斉明天皇三年(六五七)以来おこなわれたと記してある。昔は旧七月十三日夜精霊棚を造って祖先の霊をむかえ、先ず迎え団子をお供えする。盆供養の献立は各地によって異なっている。十五日の夜は双盤の音にさそわれて精霊様は西方丸に乗られて西方浄土にむかわれる。

○私はこの精霊流しの夜、精霊船を大波止に流しおえ、一同が各町に引きあげて帰るとき、ゆつくりとした調子の「もどりカネ」に合わせて暗い道を歩いて家にむかうが、其の時のカネの音が遠くより聞こえてくるのが私には一番長崎のお盆らしい感じがする。そして、盆の十六日には伊良林の光源寺に昔から有名なウグメの幽霊の木彫が出るそうである。因みに幽霊の御開帳は午前十時半より午後三時までの由。

